

逆打ち衛門三郎  
上下逆転



上も空なり下も空なり生死海を空じてのち実相智遍照す



罪業と再生

再生の地石手寺

# 罰当たり地獄行きぞ

## いまに衛門三郎みるぞ

久万の道の駅で若い歩きの遍路さんに逢った。彼は職務質問されることを嘆いていた。不審者扱いされるのだ。ホームレス救援をしていて、同じような嘆きを聞いていたからピンと来た。その彼がこう言った。

『今に見ておれ、衛門三郎見るぞ』とよつぽど言つてやろうかと思つた」と。

衛門三郎は生きている。

## 見かけは汚い弘法大師を

## 追ひ払う無慈悲な衛門三郎

衛門三郎の話は、「罪と罰」の話である。衛門三郎はこともあろうに弘法大師を叩き出す大悪人である。私はずっと自分は衛門三郎とは関係ないと思つていた。ところが告白（仏教入門1参照）したように、ある極寒の日、一人の糞尿にまみれた泥酔の老人が門前に横たわつて動かない。私は彼を家に入れようとするが悪臭に狼狽していたときだ。師匠はすくつと彼を抱き上げて家に入れた。そのとき思つた。

## 「私こそが衛門三郎だったのだ」

テレビでは毎日のようにパレスチナの殺戮やアジア・アフリカの飢餓が伝えられる。また、格差で学校に行けない子どもたち、結婚しない若者、子どもをつくれなことが報じられる。

彼等が我が家にやつて来たらどうするだろう。

学資を貸すか、家に泊めるか、食事を出すか……

追ひ返すならば、衛門三郎である。

あかしんごうみんなでわたればこわくない

戦争もみんなどころせばいたくない

.....

やつていないで済ませばそうりの国うつくしく、ほこれば病みゆく罪と罰・門叩く音はすれども声きこえずば地獄ぞ住み処

仏教は罪の自覚から始まる。

罪の自覚とは自分が衛門三郎であると知ることである。

ここに遍路の原点がある。

## 衛門三郎は逆打ちで大師に会う

閏年に逆打ちをすると御利益大なり。そのルーツは衛門三郎。石手寺の境内は五仏曼陀羅。五仏を観光客は右に回るが、地元の信者さんは左回りに巡る。

(一) 従来石手寺では、歩き遍路さんや悩みの方々をお泊めしている

右回りは布施行、左回りは修行  
弘法大師は左回りして覚る  
衛門三郎も逆打で大師に会う

逆打で三郎が弘法大師に会えたとは、汚い乞食僧の真の姿が見えたということ。

実 は 弘 法 大 師  
見 か け は き た な い 僧

を衛門三郎は追っ払う。三郎には僧の正体を見破る眼力がなかった。見えないものには心に尊いものが見えない。その答えは、「右回りは慈悲」「左回りは修行」に隠されています。

## 逆打ち・左回りが修行

いくら慈悲行をしようとしても眼力がなければ施すことはできません。誰に何を施したらいいのか。見かけが綺麗な者に布施して、汚い者には布施しないのであれば、再び訪れた汚い僧を再度追っ払うでしょう。相手が弘法大師だからするのではなく、実はみんな弘法大師なのです。弘法大師も二十歳のときは市中に糞尿を浴びせられながら光明という名の布施者に助けられて苦難の遍路をする一人の遍路人であり、後に室戸で発心し

て大師への道を発見します。(是非仏教入門4三教指帰を読んでください)  
汚い僧が自分と同じ人間であり、今夜の夜露に苦しむだろうと思うから布施をするのです。

このとき布施は布施ではなく自分の為となります。では、この眼力はどうすれば身につくのか。無心に不動呪文を唱えて、自分の至らなさを懺悔し煩惱を反省し慈悲を求めるのです。それは右回り、即ち順打ちです。亡き人を供養し、悪業を懺悔し、布施して辺土し、接待される行です。そしてそれを下地として、四年に一度、逆打ちの左回りをします。自分に開眼の時が訪れるのです。貪りや怒りの煩惱によって覆い隠されていた真実が見え始めるのです。瓦礫と宝玉を転倒して見ていた、心が入れ代わって、真贋を見抜く眼力が身につくのです。

では真の宝とは何か。

衛門三郎は再生して人々の役に立ちたいと言いました。若き空海上人は、石槌を左回りして室戸に「自他兼利濟」と第二の発心つまり仏の発心を宣言しました。

発心に二つあり

(一) 自分の為の発心

(二) 自他兼利濟 (仏の発心)

三郎が、罪を感じて出奔したのは、自分のための第一の発心

である。子どもの死を痛んで供養の旅に出るのも、実は自分のための第一の発心である。三郎が再生のとき、「人のために尽くしたい」と願うのは、第二の自他兼利済の発心である。

弘法大師が、二十歳で四国に放浪するのも、御自身が進退に谷まきわつて嘆息する自分のための発心である。ついに室戸で明星を発見し「自他兼利済」を決心するのが第二の発心である。

発菩提心真言には、この「自他兼利済」の願いが籠められねばならない。しかし、そのように心底思い始めるのはまだまだ時間がかかる。

## ●●●●●●●●●● 思うとしているは大違い

弘法大師は「自分も他人も幸福になる」ということを室戸で決心する。これは第二の発心であり人生の再出発再生である。しかしその決心には重大な問題が隠されている。

自他が皆一緒に救われることを決心したのだが、その決心には次の三段階があるのだ。

- ①正しいと思う
  - ②そう願う
  - ③そうしている・・・この三つは根本的に違う。
- たとえば、東日本震災で人々が路頭に迷った。
- ①の人はテレビを見てうなずく。
  - ②の人は、助けたいと祈っている。
  - ③の人は既に東北に出かけて毛布を配っている。

お勤めには「発菩提心真言」が欠かせないが、菩提心とは

(一) 悟りを求めること、

(二) 人々を救済すること

の二つである。私たちは何度も「おんぼうじしつたばだはだやみ（我は菩提心を發起せん）」を唱えるが、衆生再度を念願しているのか。これが逆打ち。遍路修行の重大問題となる。

思うに、衛門三郎は大師を追い払うが、夜露に濡れるのは可哀相だが、家族が大事なのでやめた。つまり弱っている人を助けるのは『②そう思う』が、『③そうしている』ではなかった。だから後悔して償いをしようと家出するのである。

自他兼利済を思わない人が、思うようになるまでは千里も道のりがある。そして実行している自分を発見するまでには万里があるようにも思える。しかしこの違いが分かって、自他兼利済皆一緒に安樂を願う人は、到達しているに等しい。これを、

ほっしんそくとう  
**発心即到 自他兼利済すれば即ち到る**

という。自他兼利済を発心すると共苦し。

その日から衆生の苦を背負い始める  
悩み相談の開始である

衛門三郎の話は、上下逆転の話である。

長者の三郎が、行き倒れ遍路となり、  
薄汚い乞食僧が、弘法大師になる。

しかし、衛門三郎は、最愛の子どもを亡くし、遍路に身をやつして身の程を知り、考えを逆転させる。建て広げた家屋敷は、高慢を太らせるためではなく、弱い人々を助けるためにこそあったのである（この点是非仏教入門4をお読みください）。大事なのは屋敷か人かと問えば、人が大事であった。それを忘れていた三郎は全てを失ったが、そもそも何も手にしていなかったというべきだろう。

そして、何も持たない薄汚い遍路は、実は多くの可能性と喜びを秘めていたということになる。

### 金ではなく人情だ

と言えば、事足りるようであるが、頭で分かってとうとする人間には遠ざかっていく。だから八八の長い長い円運動が待っている。まるで車輪の上下が逆転するように

### 不動呪と虚空蔵呪

不動呪「バザラ金剛よ我を清めたまえ」

虚空蔵呪「金剛の宝よ出現せよ」

私たちの心が画用紙だとすると、そこには自分の家や地位や財産や家族や……色々なものが描かれていて、ひよっとすると

ごちゃごちゃである。

それを消しゴムで消すのが不動呪である。

すると、真っ白な宇宙が広がる。

この広大な宇宙の中で

何を拾い上げるか、何を見るか

そこに、ただ一つ大事なものを描く。これが虚空蔵呪である。

しかし、最初から良い絵が描けるはずもない。

描いては消し、描いては消しして本物ができる。

三郎は、自他の幸福を第一義とした  
再生の寺石手寺で生き方が変わる

遍路は癒しの場と言われる。

しかし、自分が癒されただけでは、修行は完成ではない。

弘法大師も衛門三郎も、苦行の果てに得たのは、それまでとは別の生き方である。

生きる方向が変わるのが再生修行

自分本位から、皆一緒の生き方へ

上下転倒して皆一緒なり

この本は仏教入門4「再生修行」の縮刷版です。

是非本書にて弘法大師の遍路行をお確かめください。

# 四国遍路開創 衛門三郎伝説

衛門三郎こそは遍路の創始者といわれる。子どもが相次いで死んでいくことや生まれ変わりの話は不思議としか言いようがないが、この伝説には遍路の謎を解く重要な手がかりが隠されている。遍路開創千二百年の記念には、忘れてはならない若き弘法大師と三郎の苦難があったことを改めて我が心に問いなおしたい。

石手寺に伝わる巻物に衛門三郎伝説はこう書かれている。

この身 今生に度せずんば いつの日にか度せん

昔、当国浮穴郡荏原の郷に人あり。名を衛門三郎と云いけり。其家代々富さかう。然に、此人の性たらく、慳貪邪見にして、財寶を貪り悪逆無道、神を蔑し仏を嫌う大悪人なり。然るに自らなす孽は逃るべきに他なし、思わざりき八人の男子俄かに皆悉く死に失せたり。夫れ子を思うは人の情なれば、これ程強剛の衛門三郎も頓て地に入る思いに堪はず、即時に邪見を翻し家を捨て身を忘れ、四国巡禮幾度いう数を知らず、時に天長八辛亥年阿州焼山寺の麓に病んでその身まさに終わらんとするにおよんで、不思議なる哉、弘法大師一寸五分の石に衛門三郎と名を刻みつけ両手に授け給う。それより幾許の年月を経てか、河野息利の男子に生まれ来たり遂に家を継ぐ。息方と名乗り、この国を領せり。この人誕生のときに日数を経るに左の手を開くことなし。茲によつて当山

(一) 源文は以下の様式である。昔、当国浮穴郡荏原乃郷人あり。名を衛門三郎と云いけり。其家代々富佐河。然尔、此人ノ性堂良具、慳貪邪見尔シテ、財寶を貪り悪逆無道、神越蔑シ仏乎嫌ウ大悪人利……

において祈願ありければ、頓すみやかに手を開かれしに件の石掌くだんの中  
ありけり。

則ちその石を当山に納む。寺号を安養寺と申しけるを改めて石  
手寺とぞ伝え侍りき。――

古来、石手寺のお弟子さんはお遍路さんが来られると右の巻  
物を開いて衛門三郎の顛末を読み上げておったそうな。

この巻物には、衛門三郎の家を見すばらしい旅の僧侶が訪ね  
て一夜の宿を乞うたが、それを突きとばして僧の持つ鉄鉢が八  
つに割れたくだりが割愛されている。その他の衛門三郎伝説で  
は必ず「見すばらしい僧が宿を乞うて、それを嫌った三郎は彼  
に辛く当たる」のである。その僧は実は弘法大師であり、その  
ことが大罪とされるのである。

私は以前には、この伝説の重要性には気づいていなかったが、  
昨今ではこの中に現実の遍路の重要なポイントが三点あると指  
摘しているのは、仏教入門2に示した通りである。簡単に復習  
すると、

① 遍路する人々は衛門三郎のように子を亡くした悲しみに悲嘆  
する人々。あるいはそれと同様に、肉親を亡くして悲嘆して行  
き場のない苦しみを癒したり、弔いのために骨を折ったり修行  
しようとする人。またその他、自分の罪を贖おうとしたり、過  
去を悔やんで自分を苛んだりする人々。またリストラや何かの  
理由で働けなくなったり、病気などで故郷を追われたり、世間  
からはみ出したり、追い出されたりした人々。総じて精神的に、  
肉体的に、世間的に、生活的に、苦難や困難にある人々である。  
② 遍路は修行であり、それによって果報があるということ。衛

門三郎伝説では、再生して人助けをする能力を得ているが、こ  
れは比喩的表現であり、実際に遍路を修行した人々は有形無形  
の利益を得る。

③ 衛門三郎伝説の冒頭、世間に疎まれる象徴としての見すばら  
しい僧侶は現実的には乞食であるが、生活困窮者が門口に立つ  
たのに三郎は冷たくあしらう。つまり接待をしない人間は罰が  
当たるということ。現実には接待しないことよって傷つくの  
は遍路人であるが、やがて遍路に出る三郎はかつての自分がし  
たように今度は迫害されるのである。何より、接待できないと  
いうことがその人間の狭量や幸福を受け取る感受の無能さつま  
り幸福から遠くに居ることを示している。

これらは仏教入門2に示した通りであるが、再度衛門三郎伝  
説を再説して、先に意識した弘法大師の三教指帰と共に見るこ  
とによって、弘法大師と衛門三郎によって創始され、時代を越  
えて代々受け継がれて今日に綿々と営まれる、現実の辺土行を  
明らかにしたい。明らかにするとは現実をより現実的に生きる  
という意味である。

さて、この伝説の真偽はさておき、というのは昨今輪廻転生  
を信じている人は少ないし、そもそもお釈迦さまが輪廻を説い  
た形跡はないからである。それについては拙著「仏教入門2 &  
3」を見てほしい。毒矢の譬えのようにお釈迦様は、あの世が  
いかようであろうとも解脱できる方法を説いておられる。

この衛門三郎こそ代々遍路の最初の人とされている。つまり  
遍路とは何かを問うとき、この伝説の中にその答えがあるとい  
うのである。まずは、現代訳「衛門三郎伝説」を見てほしい。

## 新訊、衛門三郎遍路事始め

今から千二百年も前のことである。石手寺より南へ十数キロ

行ったところに荏原という村があった。そこに衛門三郎という長者が住んでいた。長者というからには屋敷があり広い田畑を持つていた。少し日本史を勉強した方なら「三世一身法」とか「墾田永年私財法」を覚えているだろう。豪奢な生活を覚えたために税金では賄えなくなった奈良の政権は開墾した土地を自分のものにして良いという法律をつくってしまう。そんな時代である。税金が上がリ、食っていけない人々や、移住の自由を奪われ防人などの兵役や強制労働を嫌った人々は、無理やり割り当てられた口分田を耕作放棄して、あるいは借金から逃げて、逃亡者となつていた。逃亡と書いてチヨウボウと読む。それが逃亡者や自由放浪人の名前である。空海大師の「三教指帰」に真魚（空海の青年期の名）の親友として登場する「私度僧」も逃亡した自称僧侶であつて、政府の許可なしに勝手に僧侶を名乗る語りのような抜け人のような存在である。当時、各地に国府が置かれ、国司が派遣されて彼らが税金の取り立て人や強制労働

の執行人として武力を背景に君臨しつつあった。もともとは地方の豪族は独立していたし、それ以前には人々は自給自足の狩猟生活をしてきたのだから、豪族や朝廷に支配されるのは大きなお世話である。以前同様に自由な狩猟生活を望む人々は、山間部や半島の先端に逃げて貧しいながらも呑気な生活を堂々としていたと想像できる。その山間部や半島先端が辺土または辺地と呼ばれる土地である。その僻地であり権力やその軍隊の力の及ばない辺土に住む人々がいた。このような状況を想像しつつ、衛門三郎の話を進めてみたい。

口分田から逃げた逃亡生活は自由ではあるが、海賊に仕立て上げられた藤原の純友や、五家荘や平家谷に逃げた平家の落人などのように、逃亡者はいつ追手につかまって殺されるかも知れないし、住みよい地域を朝廷や地方豪族に占拠された上に、耕せば自分のものになるという永年私財法を施行されては、耕作できる土地などさらさらなく、僻地の不毛の山間や人の来ない入り江に住むほかなかった人々にとって、口分田を捨てることは安定した生活を捨てて、いつ飢餓に襲われるか分からない生活を選ぶことでもあった。

そんな中で、衛門三郎は道後平野を流れる重信川から山間部へ向う荏原という里に開墾していたと思われる。その地域には「網かけ石の話」が伝わり、三郎の八人の子息の墓といわれる「八つ塚」が小高く積まれて、それが八つ今も残っている。今でこそ重信川は伏流水の川で洪水となることは想像できないのだが、大きな石を網を懸けて引いていき、川の氾濫止めにした話が伝わり、八つの塚は川の防波堤のように見える。



そうすると衛門三郎こそも永年私財法よろしく自分で新田を開墾していたのである。渡来人のもたらした水田耕作は稲穂の実りを確実なものにして人々の生活を安定させたが、その結果としてその果実の奪い合いが激化して、豪族は鬭争を繰り返して、その中で勝ち残ったものは国家を名乗り盗賊と化した。また生活が安定すると人口が増えて、食糧危機が起こり、松本清張が「砂の器」に明らかにしたように、田畑を持たない次男三男はもとより長男以外の女子は、口分田の配給を得ることなく、路頭にさまようこととなるのは必定であつたらう。だから三世一身法や永年私財法が施行された。

開墾の場所からして、三郎は字のごとく三男であつたらうか。自分で手つかずの大地を探して、蔦を払い木を切り倒し、根を切り石を掘り除いて、溝を切り水を引き、堤を叩いて漏水を止め、枯れても枯れても苗を植え続けねばならない。長者のようであり庄屋のようであつたというのだから、開墾には成功している、一方では安定し豪奢な宴会も時には催しただろうが、だからこそ少なくない郎党を抱えて彼らの口数も養わなければならない重圧があつたらう。

その日、見すばらしい僧侶は荏原の里を歩いていていた。見すばらしいというのだから「養老律令七五七年」の第三の僧尼令に(一) 空海上人も三教指帰によれば三男である。三郎は空海上人を指定しているのか。三郎伝説を書いた人は娑婆世間を熟知していた。(二) ① 国家の許可なく僧侶になれないこと。② 民衆に仏教を説いたり、民衆と交わったりしてはならないこと。③ 勝手にお寺を造らないこと。などが説かれる。ということとは、空海大師が三教指帰に書くように、本来の仏教の目的は、自他兼利濟であり自分も他人も共に救われることであり、即ち民衆と共に歩んで民衆が救われることが仏教の教えである。仏教は貴賤の別を問わず、貧富の別を問わず、あらゆる人々生き物に開かれていのである。ある見方をすれば、この時代の伝教大師最澄大師も、貴賤を問わない仏教を説いている。

は、私度僧の禁止が書かれていることから、かの僧は私度僧であつたらう。その人は実は弘法大師であると伝えられるから、

「進退ここに窮まる」と嘆く人でもあつた。

今日の歩きの遍路さんがそうであるように、寝袋を持ち歩き、はや何日も屋根の下で寝たことはなく、風体も既に破れた袈裟と裾のすり減った衣が汗臭い臭いをさせていただろうから、怪しく思う村人に寝入りばなを追われたり、また蚊や毒虫に安眠を妨げられたりしながら体をやつれさせていた。そんなふうに変形も汚くなっていたから、村人も嫌って食事は何日も取つていなかった。今日も何軒かの玄関に立つて、少しばかりの食事を請い、また納屋か軒先で一晩寝ることを頼んでみたがなかなか

そうならば最澄大師も空海大師も揃って身分差別に対する反論をしているのである。貴族社会へと移行することに抵抗しているともいえる。ならば、僧尼令に「民衆に交わるな」とあるのは① 仏教秘術の独占秘匿と貴族による私有化。② 僧侶の大衆化による民衆の能力の向上の歯止め。③ 差別社会の固定化と権力利権の独占化。これらの利権争いとしての側面がある。この独占と私有化への抵抗と本来の姿への回帰こそ両大師が目途としたことである。そこで、私度僧の有意義が明白となる。即ち、私度僧とは仏教の甘露醍醐味を独占せず大衆に広く頒布し、自他兼利濟を実行する使徒なのである。そのことは三教指帰の末尾に手に取るように明瞭な表現で開示されている。

(三) 三教指帰假名乞論冒頭16頁に阿毗私度(私度僧)と光明婆塞(優婆塞)が真魚青年(後の空海大師)の親友として登場している。衛門三郎の戒名は光明院四行八蓮大居士である。これは後代に三教指帰を参考にして付けられた名かもしれない。衛門三郎伝説は後代のものとしても、空海大師が語る実在としての光明優婆塞という人が居たことは間違いない。その上、その人は「時に篤信の檀主たり」とあるから、彼こそが今という善根宿や食事の接待をして、空海大師を歓待したことは事実である。

(四) 三教指帰に弘法大師が自分のことを書いて大口吐露している。三教指帰は儒教道教仏教の三教の優劣を書いたと一般には言われる大きな間違いであり、それは彼の出家宣言の書であり、体制擁護の教えである儒教、体制からはみ出した生き方の道教、そして唯一に体制内の特権階級も体制外の困窮者や被抑圧者も共に救われる仏教を説く。即ち彼は体制内で大学へ行き出世しようとするが、身分に阻まれそこから逃避する。即ち儒教で生きようとするが、行き詰まって道教的放浪をする。しかしどちらも自分や他人を幸福にしないことを知って仏教へと必然的に進むのである。その自伝が三教指帰である。

か良い返事を貰えない。今晚もひもじい思いをしながら河原で一夜を過ごそうかと諦めかけていたところ、川の向こうに明かりが見える。少しばかり大きな屋敷だろうか。見すばらしい僧はもう一軒声を掛けてみることにする。

そのころ太陽が照りつけ今年も不作だろうかと心配しつつ、ついつい一族郎党と共に早朝より夕方まで働きづめで、鍬を握る手も痛み、熱中症なのかふらふらと屋敷に戻ってきた衛門三郎は、疲れのためか多少いらいらして「お前たちはまだまだ若いのだからもっと真剣に働かないかん」と息子たちに愚痴っていた。というのも昨年は日照りで水が切れてせつかくの稲穂は枯れて、大勢が死んでいったことを、三郎は自分の治水努力が足りなかつたと悔やんでいたのである。堤を築いて多くの水を取り込みたいと来る日も来る日も汗を流し続けていた。息子の何人かは働きすぎて寝込んでいるものもあつた。そんなだから三郎は憔悴しているのである。

そこへかの見すばらしい僧が到着する。

「怪しいものではございません。旅に困窮しております。なにとぞ一夜の宿をおめぐみくだされませんか」と、僧は勇気を出して言ってみた。

三郎は板戸ごしにその声を聞いていた。声は四十代半ばかと思う。五十歳も後半になれば体も衰えてきて使用人として置いてもらえないことも少ないと聞いていたから、なんとかしてやらねばという気も起こつた。しかし一日の労働がきつかつたから朦朧と考えている。そして最近の噂話が映像となつてよぎつていく。不作のために借りた借金が返せなくて娘を捕られ自暴自

棄になつて、田畑を捨てて妻も捨てて家を捨てて逃亡者となつた男の話である。立派な男だつたらしいが、野宿を重ねるうちに一月もするとみるみる落ちぶれて面影もなくなり、三カ月もするとどこの誰やら分からない、髪はぼうぼうで獣のような悪臭を放ち、衣服も体を覆うほど布が残つてなく、あちこちの肌が露出して見られた様相ではないので、村人は遇つても遇わないうりをするから、本人は恥ずかしくて村へは下りてこれないはずなのに、あたかも誰も居ないかのように、そのような無様な格好をさらし者のようにして歩いているというのである。結局、彼は誰にも相手にされなくなり、どこかの山奥で獣と一緒に暮らしているというのである。三郎は、その男が獣と一緒に洞穴で寝ている姿を思い浮かべてしまうのである。

また、こんな話も思い出した。佐えきのいまみし 佐伯今毛人の話である。とはいえ今毛人のことではなく、彼が陸奥みちのくの征服地から連れ帰つたという野蛮人の話であつた。陸奥で金が掘り出されるといふので、天皇政権は兵役を強いて、軍隊をかき集めて金泥棒に行つたという。川で取れる砂金を奪い、その金は貴族階級が独り占めしたという。汚い話だが、もつと恐ろしいのはその侵略戦争で多くの男女が捕虜として連れてこられたということである。赤ら顔の野蛮人は何をするか分からないという噂が立ち、その辺りに居るのではないかと恐れられていた。彼らは生口いくちと呼ばれほど遠くない生口島に集められ、その内の何人かは過酷な奴隷身分に抵抗して島を抜け出したと聞いていからだ。三郎は背筋が凍るような感覚を覚えたが、「蝦夷の人なら一見して異民族と分かるから」と思つて門扉の隙間から覗いてみた。

日も暮れかけて、見ず知らずの男の夕日に照らされた顔は赤いようにも見えるが、見るからに華奢でどうみても逃亡者とは見えない。ずっと野宿生活をしていると見えて、肌の露出部分は真つ黒で土塊と見分けがつかない。それでも歳は四十ではない。まだまだ二十歳ごろであろう。そう直感した三郎は戸を開けていた。

「おいおい、まだ若いのにどうしてこの辺りをふらついている。おかしいではないか。逃げてきたのでもあるまいし、早く家に帰って耕せ耕せ。今の世は口分田も底を尽き、政府は豪華な自分の生活を保身するのが関の山で、盗賊にでもなるか、自分で耕した土地を自分のものにするかしない。とつと帰って、耕してその土地を自分のものにしろ。我しもそうしている」と。見すばらしい若僧が答えた。

「ありがとうございます。わざわざ私のために出てきてくださったのですね。今日も十軒ばかりお願いして回りましたが、塀の向うから怒鳴られたり、しつこいぞと罵られ泥水をかけられた家もありました。働かない私が悪いのですが……」と。

若僧が丁寧な口調でいうので三郎は訝しがる。

「こやつはどこぞの若さんかもしれん。先頃讃岐の佐伯の若いのが家出してゆくえ知れずで、見つけたら密告しろとお触れが回っていると聞いた。こりゃえらいことだ」。

そう思い始めると、少々近しく思い始めていた三郎の気持は急に冷え始める。むかし逃亡者を泊めたら「おまえは脱税する抜け人の味方か」と役人にひどい目に叱られ年貢をつり上げられたことを身に刻んでいるからだろうか。三郎は恐怖が起る

のを感じながら、その一方ではますます若僧に同情していくもうひとりの自分を煙たがっていた。

「ええい、うるさいわい、この我しにどうせいというのじゃ。この疫病神め」。他の村人のように追っ払えばすむことだが、なんとかしてやりたいと思うからよけいにいららす。三郎は昔からめんどろな性格である。恐怖で保身したい気持は家族に危害を加えられないかと思うからいよいよ心配を肥らせ、ここで若僧を追い払ったらどこかのたれ死ぬのではないかと、実際に朝行つてみると凍え死んだ硬直した死体を埋めた事件を思い出して何でもいから泊めて食わしてこつそり追い出そうと考えたりする。恐怖と哀れみの二つの心が、どちらが自分だから分からなくなつてせめぎ合うから、昼間の疲労も相まってもはやどうでもよくなつていく。ああだこうだといらだちが煮詰まつていくころ、見すばらしい僧が立ち去ろうとした。

「ご迷惑をかけたようで、済みませんでした」。

すると三郎の小さくなりかけていた方の心が反発した。

「そのとおり。お前なんか来るから我しら良民は働いても働いても天罰が下つて不作になり、その上、ない米をお上とかいう人々の高級馬を養うためとか、御殿の瓦代とかで、米びつから根こそぎ盗つていきやがる。朝廷なんていうのは純友の反乱よろしく、どつちが泥棒なのかはつきりしてる。そんなことはどうでもいいが、とつとどうせしてくれ。おい、だれか、にぎり飯でも渡して早く帰つてもらえ」と。

ぶちきれてしまった三郎は、そう言い放つと居間へ転がり込むようにしてそのまま眠つた。その後、三郎の息子が飯を僧侶

に恵んだところ、見すばらしい僧は丁寧にも何度もお辞儀をして立ち去ったことを三郎は知らない。息子は「飯をやったら」とと帰っていた」とだけ報告したのだから。

翌日、衛門三郎は目覚めたが、どうも昨日よりいらいらする。居ても立ってもむずむずして仕方がない。もう一つの勝ちつつあった心が疼くのである。世間では思いやりの心とか慈悲の心とかいうが、要はのたれ死ぬのではないかとこの先を見てしまうのである。どうしてだろうか。飢饉のときに、生き残った者たちはこっそりと米を隠して食べたから生き残ったことをうすうす知っていて、後ろめたさから大きなお地藏さんを建てたことを神様が知っているからだろうか。

今日は農作業はお前たちでしておけと息子たちに言うと、三郎はあの僧侶を追いかけていた。しかしもう既に何処へ行ったものやら見当たらない。ひよつとすると家出てきたことを勘づかれたと思つて先を急いだか。などとまたまた詮索している。抜け人とはたいへんな生き方だ、世間に追われて生きるとは辛いことだと思ひながら、三郎は家路につく。「まあ、にぎり飯をやったから、そこらの思いやりのないやつらとは違う」というように弁解してみるが、ますます五十歩百歩の自分に気がついて過去を消したい自分になっていた。

それから何日かはゆううつな日が続く。あのことは忘れようとして一生懸命働いたから、一族郎党は疲れ果てていく。今で言う過労鬱を自分が罹患し、家族にやつあたりしていくから家族や息子たちも過労鬱を病んでいった。

伝説のお話では……一夜の宿を乞うた見すばらしい僧は実は

弘法大師なのだが、その僧は七回断られ、八度目にとうとう三郎は僧を突きとばす。箒で叩いたとも伝わる。すると僧の持っていた托鉢の鉢が八つに割れた。翌日から三郎の男子八人が次々と亡くなり、強欲非道の彼も打ちひしがれてその僧を追って行くのである。この出奔が遍路の創始ということになっている。

実際に荏原の郷に行つてみると八つ塚が残っている。高さ数メートル、幅四、五メートルの円墳で、頂上には墓石やお地藏さんが建てられている。「これは墓ではなく川の堤の跡だ」と先代俊行師匠は言われていた。史実というのは伝えられる物語の向うがわの実生活にあつたというべきであるが、物語が荒唐無稽であっても誰かが生きたことを示している。逆にもっともらしい伝説でも、人の血が通わないものは荒唐無稽のでっち上げなのである。八つ塚は何を意味しているのか。

はてさて、過労鬱などを持ち出したが、天災への恐怖心と課税への恐怖心と逃亡者を匿うことへの恐怖心は嘘ではなからう。逃亡者を助け得なかつたり、自分のことに汲々として他人を顧慮できなかつたりした心の傷はけっこう人を疲弊させる。他人のことなどどうでも良いようなものだが、根が優しい三郎だったのか、見かけには強欲非道であり自分の屋敷だけ建て広げ、口にするには働きの良いとか悪いとかという是非だけでなく、良く働く子どもたちにも「もつと頑張れ」とは言っても、「体を大事にしろ」とか「お前のことを思って厳しくしている」とかというねぎらいの言葉をかけることがない三郎だったが、あの僧侶のことは気になってしかたがない。心がそこへ行つて

しまうと他のことがおろそかになるのが病気の始まりである。秋口には過労はピークを迎えたのだろうか。息子がひとりまたひとり亡くなっていった。昔のことだから病気になるればひとたまりもない。何人かの子どもが亡くなり、三郎は急にやる気をなくしていく。

なんのことはない。三郎が農作業に頑張つてこれたのは家族を楽にさせたいと思つていたからである。子に先立たれた彼は、生きがいを喪失する。何のために田畑を広げ、屋敷を大きくしてきたのか。何も自分ひとり暮らすのなら質素でも貧乏でも良い。妻や子どもがかわいいから一生懸命、疲れも感じずにやつてきたのだ。子どもの顔を見るたびに前へ前へと押し出していたやる気が、今は消え失せた。何も衝動が起こらない。生きて屍とはこのことか。鍬や鋤が手につかなくなつた三郎は来る日も来る日も朝な夕な、今は顔も見れなくなつた息子たちを思い浮かべては、居ないことを何度も何度も悔いて悲しんだ。働きの者で有名だつた三郎も、このごろは「なまけ三昧郎さんまいろうえもん」などと噂の標的となつてゐる。だから家族も彼を見下すようになった。「そんなところにまだすわつたのかえ」と叱責されても三郎の心はここにはない。そんな噂の種も三郎の名前を忘れ始めたころ、周りの人々の冷たい仕打ちが背中を押したのか、ついに三郎は家を出る。居場所もなく踏ん張る力もなく悲しみだけが彼の存在であつたのだから。

三郎の出走である。これが遍路の第一歩とされる事件である。さりとて何の当てもない。思い浮かぶのはあの若僧ぐらいである。

幾ばくかの金子きんすを持ち出した三郎であつたが、無一文になることは恐ろしく、小出しに小出しに金を使った。ときどきは乞食をまねて食事を乞うてもみたがうまくいかない。そうするとあつという間に金は底をついた。服も買えない。食事のままならない。野宿も何日も続くと体をむしばんでいく。他人が見ればその姿はいつかの見すばらしい僧と見間違えるほどである。

伝説では二十回四国を回つて会えないので、逆打ちして反時計回りに回つたら焼山寺のふもとで息も絶え絶えになっているところにあの見すばらしい僧が現れたということになっている。その僧は実は弘法大師であつて、「良く改心して遍路された。望みがあれば叶えてあげよう」と言うのである。そこで、三郎は「できるならば、伊予の領主に生まれて、人々を救いたい」と願う。弘法大師は三郎の手に「衛門三郎再来」と刻みつけた石を握らせる。それから幾ばくかの月日が経ち、伊予の領主河野家に男子が生誕するが、左の手を開かないので安養寺に詣でて祈願したところ手を開き、衛門三郎と刻まれたその石が出てきた。そこで安養寺の名を改めて石手寺とし、その石を寺宝として安置したというのである。

さて、金子も底をついた衛門三郎はどうしたか。いやどうもなるまい。服は破れ、裾を引きずり、体のあちこちが露出して、露出した部分は太陽の光で墨を塗つたように黒くなり、薄汚れた衣服や持ち物は悪臭を放ち、この世のものとは思えない獣のようなでたちで町から町へと移動していく。三教指帰の表現を借りるならば、「町を過ぎるときは瓦礫が雨のように降り注

ぎ、港の市場を横切れば馬や魚の糞尿や腐肉をぶつけられ<sup>(1)</sup>ても文句を言えないように人間離れた風体をしていた。

最近では人目をばばかりず、野草を食べたり木の実を採ったりしている。三教指帰よろしく「食糧も底をつく」と、体内の八万の虫が空腹を訴えるようになると居ても立つてもいられない<sup>(2)</sup>から出会う人には物乞いもする。

とはいえ気の弱い三郎はこの何日かは物乞いも出来ず、飲まず食わずの日をつづけていた。今日は思い切つて何軒か訪ねてみようとするのであった。

「お忙しいと思いますが、なんとか食べ物をお恵んでくれませんか。できれば何処でも良いから寝るところをあてがってくれませんか」。こんな具合で七軒ほどお願いしたが、「忙しいから出直してくれ」とか、「薄汚いのは困る。川で体を洗つて来てくれ」と言われて洗つて戻ると門が懸<sup>かんぬき</sup>かっていたりとか、「お前のような働かない者にやるものはない」などとこの家も冷たかったのである。

なんとという巡り合わせであろう。昔、自分が追い返した見すばらしい僧の姿と寸分違わない姿で、今は自分が乞食をしているのだ。

「ああ、このような気持で、あの若僧は門を叩き、物乞いするなどという口にできない言葉をお勇気を出して語っていたのだ」。そう思うとなぜか涙が出てくる。半分は悔し涙だったが、半分はやつと気持が通じたという妙に安心した気持だった。日

も暮れかけたが、彼はあの見すばらしい若僧と一緒に歩いている気持になって、もう一軒尋ねてみる気になった。それは不思議な感覚であった。何かが背中を押し始めたのである。それは久しぶりの感覚であった。

次の家を訪ね三郎は声を出した。

「たのもう。たのみたいのです。どうか今夜一晩泊めていただけませんか」。すると声が出た。

「ちようど、久しぶりに風呂を入れたところじゃわい。入つていくかな」。

これまた不思議なことはある。夕飯をいただき、風呂に入つて、今、三郎は布団の上で寝ている。布団で寝るのは何ヶ月ぶりだろうか。なぜか三郎はあの見すばらしい僧に泊めてもらった気がして涙を流した。嬉しかったのである。

翌日、彼は早々にその家を後にした。

あの時、このお家のようにあの僧侶を泊めてあげれば良かったのだ。ますます悔やまれたが、今度こそはという気持が過去を明るくした。さて、それからというもの、訪ねては断られ、尋ねてはまた断られ、十回ほど断られて次の家へ行くことだいたい受け入れてもらえる。

「なるほど、人間とはこういうものか。十人にひとりが良い人がいる。というより心の十分の一は優しくて、十分の一は自分本位で、その他に不安とか、世間体とか、お上への恐れとか、さまざまな心がうごめいていて、人間なんて分からないが、要するに良い心が表に出てくるようにするにはどうしたら良いかだろう」。こんなことを思うのである。

(一) 三教指帰假名乞兒論冒頭16頁下段

(二) 三教指帰假名乞兒論冒頭21頁上段

そうしているうちに、三郎は旅をする人とも出会う。たいていはそのような旅人は海浜や山間という人里はなれた場所を好んで寝床にしていた。中には魚とりや狩猟が上手なのがいて、いとも簡単に食事を用意するにはびっくりした。洞穴に住んで、野草を集め、魚を釣って悠々自適に生きる。その人の素性を聞いてみればなんと「私こそが本物の釈迦の弟子だ。真の僧侶だ」と豪語する。私度僧といういかかわしい人だろうと否定すると、「何を言うか。あの有名な行基菩薩を知っているだろう。彼こそ僧侶の中の僧侶だ。彼は私度僧だが、各地に散らばる私度僧こそが下層の人々を救う真の仏陀だ」と断定した。つづけて「朝廷が雇っている僧侶どもは災い除けのために呪術ばかりやっている。何やら中国ではもっぱら道教とやらの仙術とかと仏教の呪法を競わせて、雨乞いだの、悪霊の封じ込めなどをやらせているらしい。それをまねて中央のやつらは法外な税金をつぎこんで留学生を送り込み、長安や天竺の最新科学とか称するまじないを盗んでいるのだ。その担い手が公務員の僧侶というわけだ。そもそも、老荘思想も仏教も人々を苦しみから救い出し、幸福にするためのやり方なのに、ご自分の都合で莊園や領地を横取りして、相手を殺したり、戦争に持ち込んだりして、人殺しをやつてのける。ところがだまし討ちをするわけだから、殺したはずの敵の怨霊が夜な夜なやつて来て罪を暴くわけだ。それで眠れなくなつて、仏教に怨霊退治をさせるといふわけだ。そもそも騙したり横取りしたり殺したりすることが罪

(三三) 七四九年没。始めは私度僧。後に東大寺大仏の勧進に利用され朝廷から菩薩の称号を貰う。

なわけで、その罪を犯しさえしなければいいのに、悪事はやめられない。してしまった悪事を消すために仏教を悪用している。とんでもないはなしだ。というわけで、本来の仏教は、殺さない、奪い合わない。知ってるだろう。不殺生、不偷盗というやつだ。これが基本だ。自分で稼ぐ。他人を傷つけない。当たり前のことができない世の中になつたから、わざわざ大事そうに仏教だの何とか教だのとお大事な名前をつけて奉っている。国を挙げて、みんなを騙し合つてこつけないことだ」。

三郎はくどくどしい演説を聞いていたが、仏教だの老荘だのというなんやらまああたらしいものに触れて、わくわくもしてきた。そして、「しばらくこの男についていろいろ教えてもらうのも良いかもしれない。しかし毎日の飯に事欠く我しではどうしようもない」と思つてこう頼んだ。

「しばらくあなたの弟子にはなれまいか」。

「じゃあ、ついてくるか」。

「師匠とお呼びして良いでしょうか」。

「いや、あびしど、いやあび法師と呼んでくれ」。

(四) 三教指帰に空海大師の膠漆の執友(漆や膠のように切りなせない一心同体の無二の親友)として阿毗私度が登場する。実在の人物であり、もしも三郎がその時代に四国の辺地を放浪したなら、出会わないはずがないので、その名を冠せる。三教指帰の異本である響響指帰の注に阿卑私度とある。アビ法はアビダルマ *abhi-dharma* であり法に通じた者。 *abhi* なら恐れなき者。否定の *vi* と卑賤の卑なら劣っていないという意味。アビラ *abhi* から名付けたなら勇猛に仏教に邁進する者の謂い(意味)である。阿毗の音写はアビダルマ 俱舍論 法に熟達せる者のニユアンズであり、わざわざ注に毗を卑に換える意味は卑しくないか。ただしこの語は一般人には深読みできない。真の行者という意味を持たせている。あびしどという語は一般人には深読みできない。特に、アビと私度の組み合わせは、私度は私度僧の私度であり、国家権力に否定される御法度の意味を激しく持つ。それに真のといふ接頭語を付けるのだから真の偽物ということであり、世間では疎まれていた私度僧こそが真実の修行者であるということを通達に表現している。

というわけで、二人の行脚は始まった。

彼らが向かったのは、おそらく四国西端の佐田の岬とか、南端の足摺岬とか、室戸岬とかである。あるいは人里はなれた山奥である。石槌山や金山や人の住めない辺地である。

彼らは狩猟したり草木や木の実を集めて生きていた。三郎が驚いたことには、辺土には少なくない人々が暮らしているということだった。海浜や山間部には一見して人影がないように見えたのだが、あびさんが「おーい」と叫ぶと、いったいどこに隠れていたのだろうか、雲が湧くようにあちらこちらから人が出てくる。洞穴や木の蔭から出てくるのである。

以前なら「なんとという薄汚いやつらだ」と見下しただろうが、今では三郎の方がみっともない格好をしている。みっともないという見方は今ではやつらの見方であって、やつらというのは過去の自分をさしている。三郎はそういう見方を今では見下している、ここの住人たちは新しい見方こそ、人間らしいおもむきだとみんな言うだろう。都会のやつらの方が妙にめかしこんだり着込んだりして奇怪なのである。夏の衣、冬の衣、慶賀の

が跋扈し、その人々は私度僧などと呼ばれ、一つの流行となっていて、庶民の悪政への不満や抵抗を代弁し、権力者も留めようのない社会潮流としてあったのである。私度僧と唱えれば、悪政是正、庶民救済を示し、その旗印が行基とか私度僧であったことは間違いない。そうでなければ空海大師が、このような危険な用語をあからさまに使用し、かつその直筆や文章が国家権力の圧力を跳ね返して、今に伝えられるはずはないのである。とすれば国家権力内にも、税金を貪ったり、教えをねじ曲げて私利私欲に使用する輩に対しての批判と是正運動が起こっていたのである。だからこそある意味で危険思想の空海大師が政界の中央へと進み得たのである。そのことは最澄大師の一切衆生皆成仏の思想と重なり、その天台思想も一時代を風靡する。この流れが河野家出身の一遍上人の「河原者救済」に繋がると思像する。河野家の人民救済の嫡子息方とは実は時を超えた一遍さんではないか。実の所、四国遍歴の遍路としての流行は室町以降と考えられ、そうすると一遍上人と時代が合って来る。

衣、喪中の衣というように奇妙な取り決めを律儀に守って、まるで裸の王様か狐の嫁入りのようなありさまだと此処の人間は思っている。人間は、住めば都というけれど、世間に順応して生きている。郷に入れば郷に従えである。順応するのは良いことだが、順応していない他人様を悪しざまに言う、世間は互いが互いの首を締め合うこととなる。常識というやつが互いに相手の首を締め合せて、世間から追いつくのである。村八分とかスケープブゴートという。要は、当たり前とか常識というのは危険な思想で、野蛮で粗野で質素で何もなければ自由な今の生活が染み込んだ三郎には、今の生活が当たり前であって、過去は狂人なのである。

洞穴に住んで、家もなく布団もないが何も困ることはない。どんぐりのあく抜きを教えてもらったから、木の実を蓄えておいて調理すれば何とかなる。海女さんには海にもぐって海の幸を採る方法も教わった。贅沢を言わなければその時その時に海や山に少ないご馳走を馳せ走って用意すれば日に一食は固い。それよりも、今日は我しが行ってくる。今日はお前が行くか。という具合で、かわりばんこに狩猟に出かけ、採ってきたものは保存できるわけでもなく、みんなで分け合うから、なんとなく暢気である。親密さも湧いてきて生活も楽しい。家の塀もなし、我しの米びつお前の米びつということがない。

こんなふうな生活は、辺土に居ればなんとかなるわけだが、町中ではこうはいかない。狩猟漁労の悠々自適な生活といえは  
町中ではこうはいかない。狩猟漁労の悠々自適な生活といえは  
登場する。海女ではなく、尼あるいは女であるとの説が有力か。こべとは穀を云い、老女との説なら母を指す。こべを場所指定とすると不明。ここでは海女とする。



格好良いが、やはりときどきに町の生活が恋しくなつて出かけていくと、町のやつらは世間のものさしを振りかざして「この馬の骨だ」と罵る。先頃までは「我しは荏原の名門、衛門三郎と申す」と気張つてもみたが、「ああ、あの負け犬か。かつての風貌はどこへ行った。この阿呆め」と言われて、草木と貝獲りの暢気な生活を啓蒙してみたが、かつての自分がさういう野宿の者を見下した姿勢を思い出して、住む世界が違うから到底理解されないだろうと相手に落胆するというより、人間というものに落胆するのであった。

そんなわけで、辺土の生活に味をしめながらも、都会との落差と軋轢に齟齬を感じながら生きていた。こんな落差を感じて不安になるときは、阿卑さんに仏法を求めたのであった。心の空白というものはなかなかならないどころか、子を亡くし、家を失い、世間を出奔し、身一つになつて、食つていけないときは乞食を真似たし、生きるのに必死で無我夢中であつたが、仲間も出来て、死なずに生きて行けると安心してから、人生への渴望は前よりも増したようであり、このまま死んでなるものかと思つと、阿卑さんが秘匿している秘法を強請るのである。「阿卑さん。あなたの弟子になつてから随分一緒に過ごした。そろそろ仏法を教えてくださいと何度か頼んだがなしのつぶてである。それどころか、一度はこう言われた。

「お前は、何か金科玉条なる法があつて、それで心の空白を埋めようとしているのではないか」と。そしてこつとも言われた。

「道にできた穴凹は岩を持って来てそれを埋めることが出来る。また川を渡ろうとすれば、木を倒して橋にすればそれで渡

ることが出来る。しかし、心の空隙を穴埋めするものはあるか。満たされぬ心を満たすものは何か。遂げられぬ思いを遂げるものは何か。そんな巨石や巨木がどこかに転がつていようか」と。三郎はこう言われて、「なんだ、阿卑法師は、勇猛な度を越す優れた坊主かと思つていたが、本当は阿呆法師か。天竺とかの国で古代に退治された敵蛇のアヒか。それとも秘法を盗まれたくないのか。けちな奴め」と思うのであつた。そして、ある日、三郎はどうとうこう言い放つてしまった。

「あなたのお蔭で質素な生活の意味深さはよくよく分かつた。また一見貧相な人々の絆が深く、友情のありがたさや共に住むことが意義深いことも分かつた。しかしこれが全てなら、我し求めていたものではない。また会う日を楽しみにしたい」と。こう言つて三郎は单身旅をつづけることとした。別れ際、阿卑私度は言つた。

「仏法は、遠くにあるのではない、自身の中にある。自分の心の中にある。しかしながら、自分を探してもそこにはない。なぜなら未だ悟つていないからである。ではどこにあるか、却つて他を訪ねることかもしれない。自分以外のところにある。他人の中にある。他人に関わるその中にある」と。

また三郎はとぼとぼと歩き始めた。今度は足摺岬へと。その途中、今の金山出石寺辺りで、しばらく洞窟に住んだ。すると先客がいて、何やら呪文を何べんも唱えている。声をかけると、その私度僧らしい修行僧はこう言う。

「あなた、阿卑法師のところまで修行している荏原の三郎だろう。噂は聞いている。たいそうな長者屋敷を放り捨てて修行僧

の仲間に入ったらしいな。ところで、阿毘法師には何か教えてもらったか。我わししなんかあいつと半年過ごしたが、何も教えてくれん。けちなやつだ。何分、言いつ分としては修行が一定の域に到達しなければ、猫に小判どころか、泣き面に蜂らしい。傷口に毒を塗るが如しということだ」という。

「あなたも、教えを貰わなかったのか」と、三郎は答えた。「だが我わししは拜むやり方だけ教えてもらったぞ。お前にも教えてやってもいいぞ」と言うなり「ナモー アーカーシャ ガルバーヤ オーン アーロークヤ マーリーブハリ スバーハー ナモー アーカーシャ ガルバーヤ オーン アーロークヤ マーリーブハリ スバーハー ナモー アーカーシャ マーリーブハリ スバーハー オーン アーロークヤ マーリーブハリ スバーハー マーリーブハリ スバーハー ナモー アーカーシャ ガルバーヤ オーン アーロークヤ マーリーブハリ スバーハー 云々」と同じことを何べんも言う。ああ、こいつが呪文というやつだなと勝手に合点する。

「あなたの名前はなんというのか」と、三郎が聞くと彼は「我わししは沙門セムだ。シユラマナだ。家なしの放浪修行者だ」と言う。「さつき唸っていた、聞き慣れない言葉は呪文か」と、聞くと、沙門は堰を切ったように話し始めた。

「こいつは梵天の言葉でマントラという。気持を込めて何度も何度も専念して唱えれば、心の中に仏が現れる。さっきのは虚空蔵菩薩のマントラだ。本当のことを知らないやつらは、のうぼうあかしやきやらばや、おんありきやまりぼりそわかと、大和言葉で言うがそれは効き目がないぞ。ナモーは心から帰依しますだ。アーカーシャは虚空だ。この空つぼの宇宙だ。星や

(一) 三教指帰の序に一人の沙門有り、余に虚空蔵求聞持法を呈すとある。

月や太陽や、この大地や風や命や我わししらを容れている大きな大きな容器だ。この容器の中で我わししもお前も食べ物も山も川も現れては消えていく。その産み出す働きの、ガルバだ。ガルバーヤはガルバさんよというのだ。オーンは必死で拜むぞといこと。アーロークヤは眼を開け、良く見よだ。マーリーブハリは、産み出しておくれよというわけだ。スバーハーはみんな幸福になるようにというわけだ」と、べらべら話し続けるので、「どうしてそんな異国の言葉や意味を知っているのだ」と、聞くと、「まあ聞け、先ずは、謙虚にならないかん。奢りの心を捨てる。我わししが生きている。我わししの力で生きている。我わししだけが居るとか尊いとかいつまでも居るといふ気持を捨てる。なんせ、我わししらはみんなこの虚空の中の一員で、互いに影響し合って生まれたり死んだりしている。自分で生まれるわけでもない。かといって勝手に生まれるわけでもない。誰かのお蔭や何かのきっかけで生まれたり死んだりしている。これが謙虚とういものだ。そうすると虚空が蔵になって、良いものを産み出してくれるとうわけだ。我わししは虚空のことを打ち出の小槌うちだすこてさまと呼んでいる。虚心に念ずれば、そのものが産み出されるから、打ち出の小槌だ。宝物の出生だ。宝を生むから、宝生如来ともいう。如来ぐらいは教えてもらったろう。仏様のことだ」。

ひたすら聞いていた三郎は問うた。「そのことを沙門さんはどこで習ったのですか」と。

「我わししは行基菩薩の生まれ変わりだ、弓削道鏡みちかがみの弟子だとい(二) 突飛な登場と思うだろうか。道鏡は六五才で七六五年法王となる。七七〇年左遷される。七七四年空海大師誕生。四国に放浪する十八歳の時は、道鏡滅後二〇年であり、仏教を志す真魚にとって道鏡はよくもわるくも影響があったことは間違いない。

うわけではないが、これでも昔、奈良の某寺で経典を読み込んだことがある」と、沙門は答えた。

さて、求聞持法とやらを教わった三郎は、足摺へ向かう途中、どこかであったような気がする男と一夜を半島で過ごした。なぜか、三郎は自分の身の上を話したくなかった。

「あなたは、どこから来られたのでしょうか。我しは実は瀬戸内の道後の近くの荏原という里から抜け出てきてしもうた。我しは自分の息子を殺してしもうた。それというのも食うのに困ってやっと我が家に辿り着いた坊さんを追い返してしもうたからじゃ。あの日は疲れておつて二つの心が行ったり来たりしてたのじゃが、面倒くさい気持が勝つてしもうた。本心は助けたかったのじゃが、ひよつと国司に睨まれせんかと恐怖心が保身に走つてしもうた。我しだけなら何ともなかつたが、息子や連れ合いのことを考えると急に心細うなつて、怒鳴りつけたんじゃ。その後は、転がり落ちるように、自分のことしか考えんようになつた。気がついたら我利我利亡者で、息子にも八つ当たりしたり、働け働けで何も見えんかつた。子どもたちが死んで、我しは自分が殺したことに気がついた。しかし家族を守るという目標がなくなつて、悲しゅうて悲しゅうてどうにもならん。家にも居られんなつて、このありさまじゃ。我しは冷血漢の人殺しじゃ」と、三郎は一気に過去の針の山を駆け抜けた。するとである、聞いていた男が口を切つた。

「我しは、娘を殺しました。好きな男が出来ましたが、許さなかつた。うちの田んぼは山の上の方で、水汲みを日に何時間もしても田はずぐ干上がる。粟や稗でも生きてはいける。けど

年貢は米で盗りに来る。目茶苦茶じゃ。自分らは働かずに取り分は減らさん。まあそんなことはどうでもええ。娘には苦労させまいとええ家に嫁に行けと言つてやつたら駆け落ちした。それつきりじゃ」と。

それを聞いて三郎は唖つた。

「我しだけじゃないのう。我しだけじゃないのう。我しだけじゃないのう」と。三郎は重たいものが削げ落ちるような気がした。「これがアーカーシャ ガルバーヤかのう。なんとつらいこと、なんとむごいことよ」。

その晩、三郎は泥海を泳ぐ夢を見た。息子をおんぶして泥の海を泳ぐのだが、進みもしない、ただただ沈んでいく。死にもしないし浮かびもしない。息が出来ず苦しみだけがつづく。

翌日起ぎると、連れはとつとに出發していた。みんな苦しみを背負いながら歩んでいくのだ。止まるわけにはいかない。ぬかるみも歩んでいける。泥沼だから力強く歩を進めるのだ。そんな高揚感がなぜあつた。

足摺の彼方は普陀落の都。死者の逝く観音様の世界である。その海岸線は何百里を経て室戸につながっている。歩むには十分長い、考えるにも十分な距離である。

室戸には有名な洞窟があつた。いろいろな高名な私度僧が修行したという洞穴である。三郎も先人を見習つてそこでしばらく居ることにした。いつかの沙門に教わつた求聞持法とやらをやつてみることにした。

ナモー アーカーシャガルバーヤ オーン アーロークヤ  
マーリブハーリ スバーハ ナモー アーカーシャガルバーヤ

オーン アーロークヤ マーリブハーリ スバーハ ナモー  
アーカーシャガルバーヤ オーン アーロークヤ マーリブ  
ハーリ スバーハ

誰も居ない夜空に、マントラが言霊ことばする。

三郎は沙門の言葉を思い出して、虚空よ宇宙よ、我わしらが容  
れものよ、我わたしの宝物を示したまえと宇宙に心を放じた。

「この果てしない容れものよ、宝を示したまえ。この果てし  
ない容れものよ、宝を示したまえ。この果てしない容れものよ、  
宝を示したまえ。……」。

そうすると、息子が見える。連れ合いが見える。一族の仲間  
がみえる。共に働いた下僕と思っていた人々が友達として登場  
する。……阿卑法師が見える。沙門がいる。一夜を泊めてもらっ  
た男がいる。身の上を打ち明けあった男がいる。

息子を失い家を失ってから空隙となっていた三郎の心は、温か  
いもので満たされていく高揚感にあった。彼の空白の住居に、  
仲間たちが集まる。

我わしは空虚ではない。一人ではない。人々とともにある。三郎  
は思い出した。

「阿卑法師が言ったのはこのことか。仏法おしえは手元にあるが、  
自分の中を探しても見つからない。他を探せと。他とは他人で  
あり、他人のことが見えるということ。他人といっしょに住ん  
でいるということ」。

そして居ても立っても居られない気持になった。「あの時に  
帰りたい。あの見すばらしい僧がやって来たあの時点で帰りたい。  
そして、あの時のもう一つの言葉を言いたい。どうぞ泊まっ

ていってください」と、そしてこう付け加えたい。「我わしも以  
前に途方に暮れて放浪したことがあってのう、泊めてくれたり  
断られたりじゃった。石つぶてをぶつけられたり、馬糞を投げ  
られたり、やっかい者扱いされたが、何軒かに一軒、必ず心優  
しい御仁が居られて助けられたもんじゃ。あの体験がなければ  
のう。しばらく家に泊まって休んでいかれよ」と。

それからというもの三郎は、とりつかれたように自分のこと  
や阿卑法師のことや辺土の自由生活者や見すばらしい僧の話し  
をしては、虚空の宝物の話をして回った。いつしか乞食語り部  
三郎というあだ名になっていた。今までどおり、町中では追っ  
払われることもあり、疲れると山間やまあいや海浜や辺土に身を寄せて  
旧友と質素な生活をして時を忘れた。また元気になる、どう  
しても話したい欲求が彼を都会へと走らせた。

伝説では二十回遍路したというが、こんなことを百回は繰り返  
返しただろうか。

石手寺に供養塔がある。幕末期、九州か中部の嫡男が訳あつ  
て深夜人知れず出奔したといえ、察しのよい人には何が起  
こったか分かるだろう。事由があつて若さんは家に居られなく  
なり、四国へ行けば生き延びられると聞いたか、あるいは四国  
に行けば余生を修行に費やして来世は幸福になると聞いたか、  
それとも重病が治ると聞いたか、彼は道後の篤志家の接待を受  
けつつ、四国行脚をすること約百回、期間にして二十年弱、つ  
いに倒れてその身を四国のこの石手寺の東山の麓に埋めた。そ  
の三代後の末裔はその骸を墓所に求めて帰省することとなつ  
た。その墓所は室町時代に開創というお山四国霊場の石手寺東

山の麓にあり、私は住職として読経に立ち会った。どうして立派な供養塔が出来たかは定かでない。他の遍路人の行き倒れの墓は小さな砂岩で造られる。それでも名を刻み高さが一尺はあるだろうか。このような立派な墓石を見ず知らずの他国の遍路人に施した四国の心ある人々の誠意には頭が下がる。遍路人も歩きに歩いたりであるが、それを迎え自分の屋敷にお泊めし深々と敬礼して弘法大師の身代わりとして送り出しつづけた四国の民はもてなしにもてなしたりなのだ。

そのもてなされた者ももてなした者もそのルーツが、根の良い聖人ではなく、強欲非道の三郎の輩ともがらであつたらばこそ、この営みは今に続いているのであろう。

さて、衛門三郎。二十回ではなく彼もまた百回を越して歩いただろうか。供養塔の主は二十歳ぐらいでの出奔だと聞くから、三郎が八人の子を持っていたとすると歳は三十五であるから、やはり二十回か三十回すれば体も弱ってくる。畳みの上で死ぬる身分では既になかったのだから。

伝説では、三郎は今の霊場第十二番焼山寺の麓で息も絶え絶えになったという。昔は人間の寿命が短かったのか、それとも野宿生活は人間の寿命を蝕むのか。早世であろう。三郎が息も絶え絶えになったとき、夢枕かそれとも実際にか、弘法大師が目の前に現れる。あの見すばらしい僧のことである。

認識とは、その人が何であるのかを直感的に知ることである。息も絶え絶えの三郎だったから、熱にうなされていたか意識は朦朧としてぼんやりと僧侶の姿を見ただろう。追いつ返して以来、何年も経っているわけだから、一目見てあの人だと分かるはず

もない。なのにそれどころかこれは弘法大師だと分かるのである。弘法大師の自筆が残る三教指帰の話は他所に意識したが、このとき既に空海大師のことは四国にこのひとありと知られていたかもしれない。

「立身出世に頼る親孝行の失敗と帰郷安住の二つの間に進退窮まって、石槌に糧を絶って大地を家とし青空を幕張とし、都会では瓦礫糞尿の雨を浴びせられたが、阿卑私度を無二の親友として光明優婆塞に衣食の糧を接待され、室戸に起死回生して、谷響きを惜しまず明星来影して、自他兼利済じたともにくうの道を得た遍路人、それ空海」。

このように知る人ぞ知る、遍路再生の人として、あの見すばらしい僧は既に四国の救済者として名を挙げつつあったかもしれない。しかしそれは仏教の大師というものではなく、逃亡者や抜け人や困窮者や病人が落ち延びて憩う場所としての辺土が認められたという意味である。

落人や乞食やはぐれものは、口分田からの上納米で生き延びる権力主体からすれば秩序を乱すやつかい者であるから、「逃亡者は悪者」「はぐれ者は賤人非人」として世間外へと棄てられていた。しかしそれは都の論理であり、抜け人を友人とし、処罰の恐怖心を克服した者にとっては脅し以外の何物でもない。

抜け人を助けたら家族もろとも同罪として奴隷にするとか、自分を剥奪するとか、村を追放するなどあの手この手で脅かしてくるから、その恐怖を感じる限り、都の秩序が秩序として見える。しかし、一旦、世間を外れ大地に雲を友達として生き

る時、そんな泥棒の論理がなんになる。弱いもの同志助け合って生きることこそ秩序なのである。弘法大師の三教指帰はそのことを如実に力説して表している。行基や弘法大師の生きざまが庶民救済として流行してくるということは、将門や純友の乱が鎮圧され、その首謀者が斬首されるなかで、口分田制度という一種収奪泥棒の論理が確立されたかのようになっていた時代に、本来の自由人の助け合いである自他兼利済の生き方が息吹を吹き返す表現形態であった。

その英雄としての真魚青年は弘法大師の基礎的な心象を四国の民のみならず、貴族の豪華な生活を横目に困窮する庶民に回復させ、このように生きていいのだ、このように生きることこそ人間らしい生き方であると宣揚し、かつその生き方を表舞台へと引き戻したのである。

四国、否、辺土に流浪するということは、困窮したとき、人と人が出会い、互いに痛みを知り合って助け合い、困窮から立ち上がっていくのだ、ということがひとつの言辞いひかたとなつて確立しつつあったのである。

その最中に衛門三郎は死の床にあった。

だから彼も既に辺土に身を置いていて、辺土に再生を待つ人であった。ならば臨終の夢枕に現れるのはそれを約束する人物であり、それは後に弘法大師といわれる人であり、この時点では真魚青年というべき室戸で谷響きを惜しまず明星来影すと豪語したその人である。

三郎はだから、このとき既に出来つつあった辺土伝説と対話していた。

弘法大師は言う。

「三郎よ、良くぞ改心して辺土を行脚した。あなたの欲しい褒美はなんであろう。田畑か、豪華な暮らしか、家族か、地位か、権力か」。

三郎は答える。

「もしも生まれ変われるものであれば、伊予の領主の家に生まれ、人々を救済したい。あなたをお泊めしたい」と。

この言葉の意味がどういう意味なのかは、私には分からない。弘法大師の言葉を借りるなら「自他兼利済」である。自分も他人も共に救う。もう少し言うならば贅沢な生活ではない、他人の財で生きる生活でもない、他人を苦しめる生活でもない。そのことは三教指帰に書かれている。

この言葉の意味を知りたいなら、もう一度、衛門三郎の生涯、特に辺土行脚を辿るしかない。三郎が、辺土の大地や辺境に生きたその生活、出会った人々、行った事々を辿ることによってのみ、三郎の果実を見ることが出来る。

# 皆一緒

重い知的障害者のホームの草分けに止揚学園がある。その園の一こまを聞いた。

太郎君がカエルの合唱を聞いていてこうつぶやいた。

「カエルさんは良いなあ。みんなみんないっしょや」  
それを聞いていた創始者は思った。

「太郎君はいつも元氣そうにしているが、心の中では阻害されているんや。ひとりぼっちや。みんなといっしょでいたいんや」と。

悩み相談の電話を始めて二十年以上になった。受話器を取るときは一瞬息が止まる。何も言わない電話。苦しい電話。泣く電話。時にははしやぐ電話。

一瞬にして、電話の世界に引き込まれる。体が硬直していく病気や、精神の障害や、知的障害や、意見の対立や、被害妄想や、幻聴や、人の抱える悩みは十人十色、いろいろである。その一つ一つを解釈しても始まらないから、その人の世界にどっぷり入っていく。

みんなそれぞれ自分自分の世界に住んでいるのだらうとつくづく思う。

そしてみんな、自分以外の人と手をつなぎたいと思っているのだなあと思う。

でも、世間はどうかだろう。

格差社会にブラック企業。人は人を押し退け、下働きさせ、ピンはねし、独り占めして我利我利者然である。ならば、人は「みんないっしょ」を求めてなんかいない。

**うまくいっている人は、独善的で独りよがりで、うまくいっていない人は人なつこくて、さびしがりやなのか**

そうかしかない。人は自分ないものを求めるのだから、阻害された人間は皆一緒を求める。勝ち上がった人間は、他人を阻害しても気付かず、皆一緒なんか要らない。中間の人はその両方を行ったり来たりしている。

釈尊は仏教入門2に書いたように、戦士という殺すか殺されるかという苦境にいて、その自分の苦と戦う全ての人々の苦を引き受けて、その弱肉強食の苦の彼方に、涅槃を見た。その涅槃とは敵と味方の区別のない皆一緒である。

空海大師は仏教入門4に見たように、身分差別の苦境に居て、一人勝ちに屈して辺境の虐げられつつも優しい人々に出会って、その底辺の人々の苦境を背負って、自他兼利済・上下差別無用の新境地を開拓しつつ、それを国家にぶつけた。自他兼利済とは皆一緒である。

ここにおいて私たちは妄想世界を立案する。つまり、

個々人の世界に沈殿するのではなく、他の門戸を叩くのである。「人の痛みを知る」とか「喜ばれる喜び」の世界である。

悩み相談電話で、彼方の世界に吸い込まれるように、他人の門戸を叩くのである。

自分の世界に閉じこもると、他人の世界に入り込むのと、どちらが妄想であろうか。どちらも妄想とするなら、自分を心に妄想を展開するの、他者を中心に妄想を展開するのの、違いである。般若心経に、「転倒夢想」と言う。

**転倒とは上下逆のことである。好悪の逆転・清濁の逆転・善悪の逆転・優劣の逆転・自分と他人の逆転である。**

欲望を停止すれば無になる。静寂の世界である。

視点を上下逆転すれば、すべてはひっくり返る。

立場を変えれば、慈悲となる。

凡夫はくるくる回るから空である。

菩薩は、慈悲勇猛だから、疾駆する限り大欲である。

仏は、泰然自若として、無も空も越えるから実相智を生む。

(一) 主人公は新聞の死亡記事を手がかりに、事件や事故で死亡した場所を巡り歩き独特な形で死者を悼む。の執筆の背景には2001年の9・11同時多発テロがあったという。「人が死を怒りに替えて殺しに行く」ことになった米国のアフガニスタンへの報復攻撃。「ニューヨークで亡くなった人に比してアフガンで亡くなった人は顧みられず、死が平等ではない」ということは生きること平等ではない」と心境を語った。(愛媛新聞より)

言葉で書けば数行で覚えることができる。しかし、旧態依然である。悩み相談電話が鳴らなければ、相手の世界に入り込むことはできない。逆転しようがないのである。相手の立場に立つというのは、言葉上のことであり、亀毛兕角・虚亡隱士きよふいんじである。他人の立場に耳を傾けている間は、自他転倒しているが、受話器を置いたとたんに我が世界に落ちこちる。それとても虚妄の世界で相手の立場に立つだけであり、本当に相手が分かるものではない。

さて、初心に戻ってみたい。止揚学園の太郎君は、なぜカエルさんは良いなあと言ったのだろう。そうだ。カエルさんはみんな仲良くゲゴゲゴと合唱しているように見えたのだ。仲間はずれなく、ともに歌っていたのがうらやましかったのだ。

とすれば、

上下の関係がないこと

仲間にいること

参加できること

この三つが大切なだろう。

**いっしょに参加して居て楽しいこと**

これである。

そう言えば仏教教団のことを和合僧という。僧とは同行のこと。いっしょに行くことである。和合は仲むつまじいということ

(二) 空海大師著「三教指帰」の登場人物で荒唐無稽な尊大な人を指す。仏教入門4参照



と。喧嘩僧ではなく和合僧である。

仏教というと、おすまし顔で、たいそう偉い悟りを得ている雰囲気があるが、あれはひよつとすると地位を得るためのポーズかもしれない。インドの仏像はにこにこしている。中国は笑っている。日本はおすましである。いやいや温顔である。我欲を捨てて覚る仏教というと難しそうで面倒そうである。だから、仏教教団も争いが絶えなかつたという。何か間違っていたのである。自他平等や敵味方の境をなくする修行に必死になると争いが起こっていた。そこで長老は釈尊の初心に戻れと号令した。それが和合である。いっしょに居てむつまじいのである。

先の仏教青年会の沖縄大会では「一味和合」が合い言葉だったと聞く。やはり達観者はどの時代にも居るものだ。私なら

## 十人十色一味和合

としよう。

一味とはみんな釈尊の弟子という意味である。

十人十色とは、それぞれの涅槃が有つて良いということである。

和合とは、いっしょに居るぞ。求道し

ているぞ。楽しいぞ

ということである。

さて、

仏教にはビナヤがある。それを逸脱すると駄目だという戒律である。ビナヤはしつかり導くという意味だと思っていたが、どうも違う。ビナヤは導きを脱線するという意味に違いない。つまり和合僧からの脱線をビナヤという。和合僧場外である。

## 和合僧場外とは、

人を殺すこと、酷く痛めること。

奪うこと、ピンはねしたり悪い労働条件で労働させること。

悪口で仲違いさせることなどである。

上下を言う者も上下逆転の者も無間地獄に墮すと経に書かれる。

なぜなら、慢心は永久に他人の門を叩かないからだろう。

扉は電話機以外にもあちらこちらに有るだろうに。場外に居たのでは始まらない。本来無東西いやいや・・・

# 本来無上下